

想丛著間奇集

四

三四一

想山著岡奇集卷之四

目録

一 日光山龍り堂ノ思議の事

美冰菴の事

一大名の夫似と御殿のありてる事

一 ちひ城蛇の尾と截く案らきすゝる事

美強勇とて左宗と稱する事

一 義濃國の熊を捕ま

一 死り神の付つまくハ魔とも云難き事

一 信州ゆくごと云怪歎と利教する事

一 鹰の首に金と鈴く迎むる事

美愚民の樂也寝なり頃りたが事

一 耳のちひ城人の事

一 龍の卵 美雪の事

一 古程人り化く見る事

一 美水業の死とかく道を遡ざる事

一 西夜房源院ゆゑの未遂とね 人性とうむとま

一 美濃四須原神社の事 不思議美靈験の事

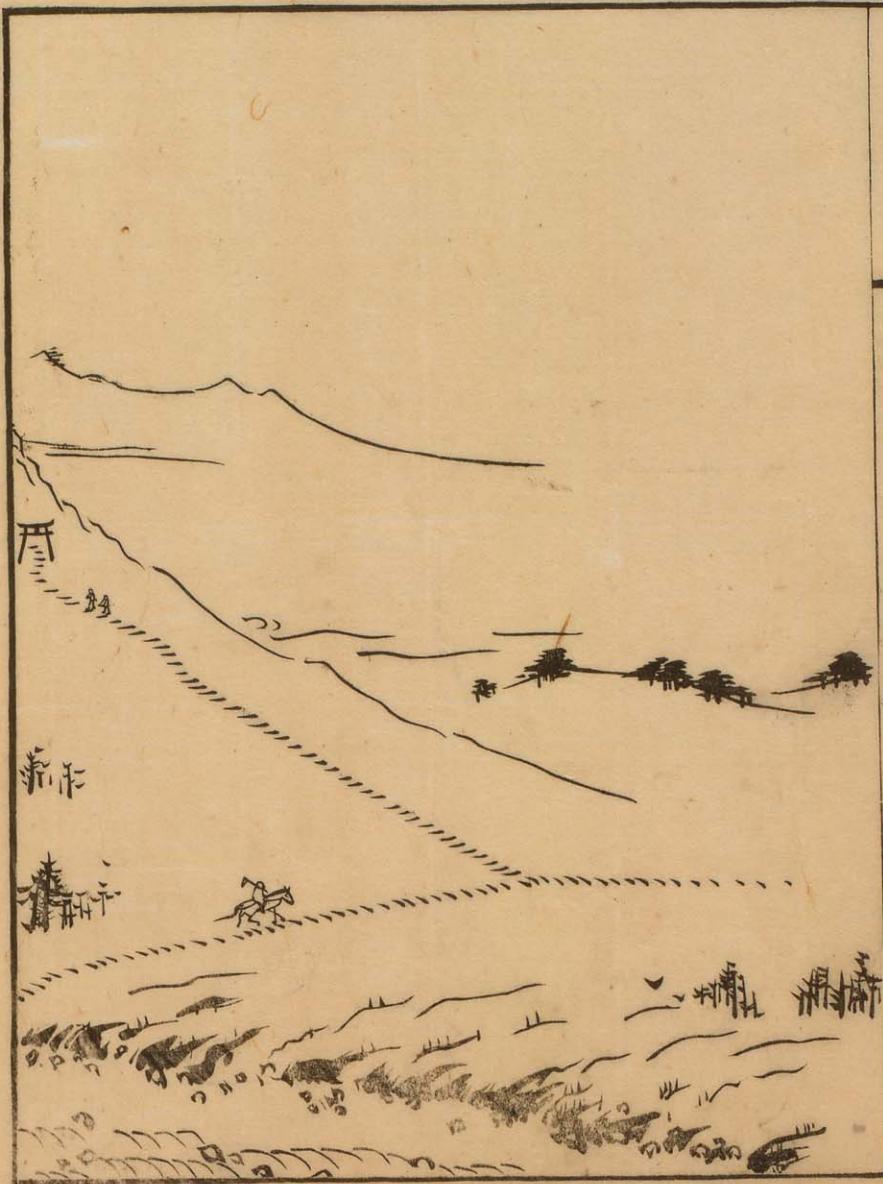
日光山外山籠り堂不思議の事

美冰岩の事

野別日光山の内河山に向ひて坐り右の方ハ猪荷川云大河源と出其川の向よ外山と云有合申の孤山山登り十八町者と云へ候と見る袍糸をども十町め止とたゞ頃は急坂には不下僅三弓の足浦り多く鳥居店有活うと顧り見合バ大若門の末浦川へ唐へ常別の方を川木の垂流せ余里一眺り見波り終京へねば取不二ハ厥きる経産りと脚と前が心地り懸空り轍に巖石よ僅び足と踏みるやどめ跡をりて巖の角も蔓の根よとまうりくく漸頂より登り渴きり

先達のもの旅亭より明橋とひづれ用意して行彼猪荷川を渡る時よ水と波立持つり是に行ゆる哉と尋向れば山上よハ水す山と覺りかゝ若くした渴り立つと即ちてあるべと云す忙年の事ふく袖り猪荷川と人へり是を勧氣堵と性ゆゑ甚ちく思へ儀成は山ア登きバとく若さの餘り渴るとハ心浮か奉とやうのを以て久あはぢ他よ居ア別く切者との事ゆる先達をさせ案内するを頼つる事あるを巴とくやうと首後と思ひうだり也りたるよ七八か月よ即りてハ猪荷屋の刀目ア無り身り跡の方(案と極つる事の外物アもすりきり去る)元もよ往せく勇を進んで

登るゝ八九歩目より勢と掠する若くさうく喰
渴むる本草を先り極く後ハ中て渴く聲も
出さずか猶くは時よ波水と呉れる故ニ枕のまゝ御
嘗と淫しきる心地寐り日本寝ゆめたどるり
おれりり一毛ふゝ毛無成事と押くちうべ
且我經年といへ人のもろき事と侮り淫むじうべ
お後頃ハめ竹と檜成やうかとぞとがへ異地
者く一間に面徳の石畳の堂うり内り一拵つか
扇子もく坐く内だりたり（物多つ天安堂から當山の
は前り二間よ九尺の龜り堂有ね左の石みく
きよか堂の後の方ハ少一凹り次と小もく而
右の又動るニ耕斗者のみく外よハ竹もさる徑の



場所を移す。蓋生の元山に
時ハ山より木立一本とく山の裏の方
より傍人の背丈の雑木まとよ葉唐子より
色移平一面の蓋生には籠り堂の内と見えバ至坪
木の面ハ云間す餘ハ墨毛を並拂ひ面ノナ六七丈
計約五石程程の男子三人前ノ縁番とニキ籠越
面ノ顔と舉て一目見するなりにねどいもぞ
行うね者げよまごとて歸り居たり彼連行する
先達の男は者ノ言葉と無くいつありとぞと同
ひ男をくくい東ノ一と言ふ丈ノハ二日だよ若
らフ二日りに日目が絶滅だ極ノ思ひと而りを
仰くよと云アインく背筋うださうますといひ
一昨日より一人と同トとくひハ外リ二人居

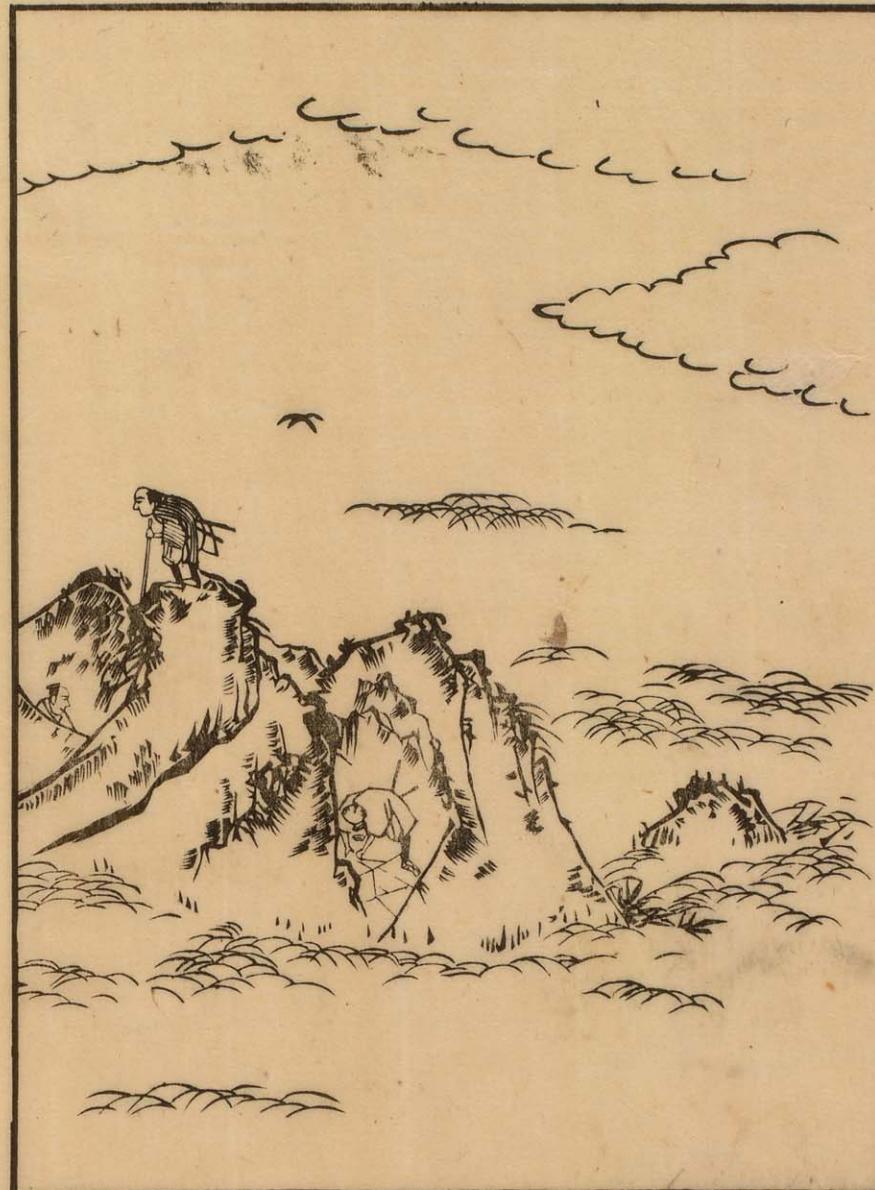
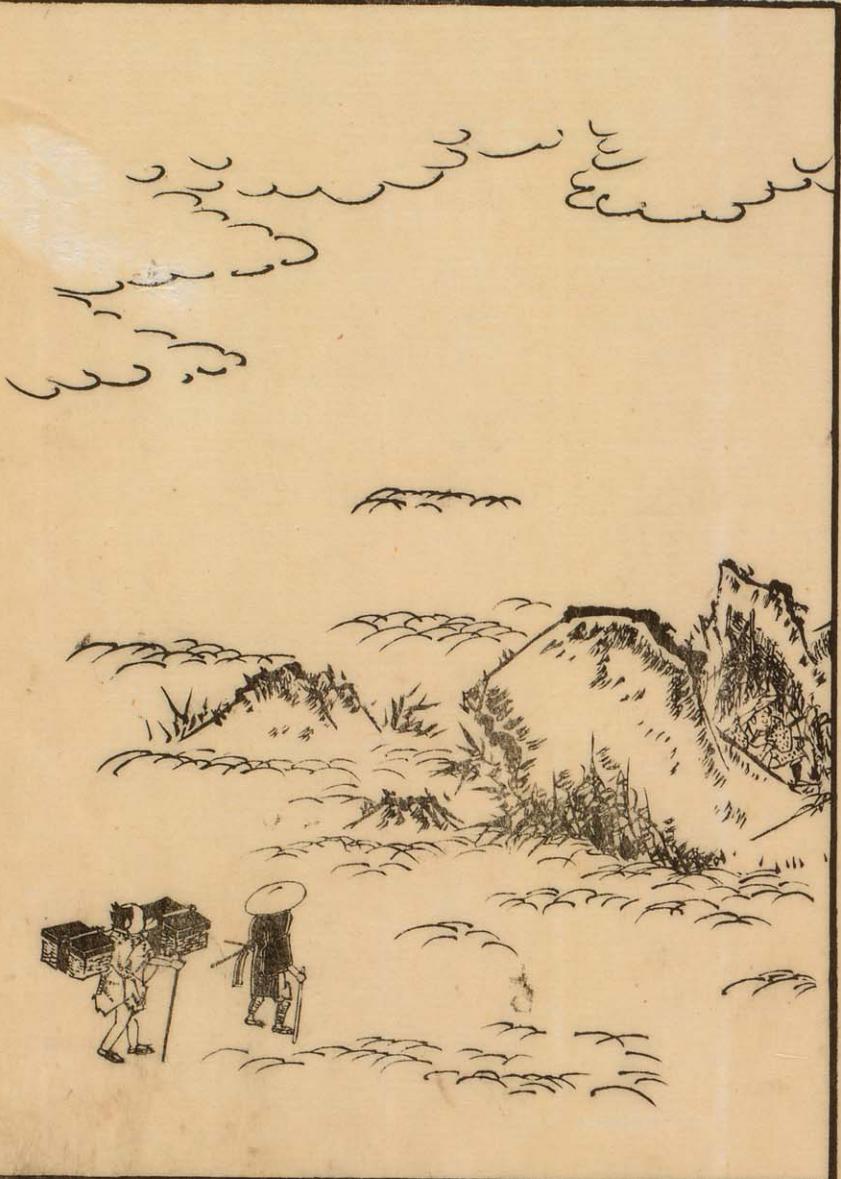
まへゆり又きのよ一人ゆりしとりよらもハ又誰ぞ
あくさん充角あんやうが大車だぞ水とやんとそ
一梶者せく後はみどり水をやつて茶椀をむく
肴種く思ひくかづ戴けと云細きは者とくこの
所へ乃食籠つまふのと心湯支の先達よ
委を向てそり肉ハ雷多く寒氣とあるすゝ音
人を以てりぐと養う肉ハ二人を三人とまろ本ハ
山腹りとと一人を終。本ハ山腹うじ松うども
着ち時ハ毎年竹板り又くとく籠りま
と云す板り何故よ度て篤りるや心猶者くの
事うメハ恩もうととよ中々懇とあひ事う
四度う一宵心願者うの奉へと言ひすか心猶者

何事も皆列靈験と有ると聞ヘリとぞく
きうなとよ奉ハ山腹躬いは心願と云ハ被く多
の事より凹凸のゆ板と竹と毛と先親の病を
と祈りまくり或ハ私子供の病ひも漏ひ故一向目
見えませぬ何事も承うど詔くり讀くり侍。板
ふく獨り又藏藥とばん並アテセト多くも
何う種の願ひよく山腹ゆと云乎思へ板今於密
あ家の僧侶お行法トリとよく一七日と乃食して
法を傳へ或ハおと教うど別を高め重ねか
奉仰りよば地ノヒは不へあり乃食も奉事ハ
一向容易うる有さまつてありとぞと仰さ
奉に激り其のゆく祈る在せひも應ハ有く徳さ

苦と神と多明うつりは戸あどよみ食を
小き援力れ二便アリ事へる難儀と咬テ
は堂は難りてふ中元事者ハ毎教夜乃院の間
猪行川と下り夜の明る而人をもど川中
みく本と浮く旅難と丸野葉なる事とぞ其の
伝承書性のをハ別と能きて脱は右先達
どき川と水とあび其勢りよよくもてた
リと出でたり事よなと有づき道理とこそ思
えが御うり度よ不思議が事の有頼の
旅行は難き者ハ心モ一七日の餘り生未兼ト山
もる事とぞ先達の云虎人始ハ茶一通ト事
ゆゑと僅一日二日居新食の供を取止か

経の者ハ福アリ無く劣事うきバヤととくさき事
の根性と燃ふるもうと信公堅固とくに養り
すか荀子と障碍とうきとく滿願成り兼ト山
ちらともも澤山より度りて支ハく恐安事アリ
度りと云旅経たも肩アミ事よと覺是佛家云
前世の爲めの惡あつて所謂後生の魚とくとのと
れもアリ相うち障碍と云ハぬ行う事とく其事
せよと又然アリ向逐とて丈ハ多く成事うく
虎人一ねううざきとぞ先大允ハ取よへく後藤と
夢現川とくすと大風吹ありば龜り堂今アリと
吹落さう、極成心持もるす渾り氣くア、と仰
て花紀國とバ何事可い傷よハ因病の頃人

宵々行車め身の居き巴妻のく宵々う趣く琴
事と思ひ又寐よと今度ハ大震にて尾房く
山へ浦り宵さま故又滿り兼光報く債の
因爲と報一報ノトキナリと告るよモ時
因爲ハ行車とれ懲懲う居く丈ハ自らの心病
孤獨と心と交連一腰のよ又初のぞくは堂室
喰先きと心持うどて終夜の腰もどくに登
明りて後述海の夜遊遊一夜二軒ハ懐ゆれ
どと背くと腰懲りと腰車出来ゆき因爲の懲懲
もる傍より毎夜唯ま人處の本をうきお化居て
足跡を累々遂に本よ及びく此事とせむト云



あるをす。有事ゆゑては、其處よりてハ、檀の牋
神ありと、龕り堂と、既落たり、心持あらじと、ゆり
まざりへるを言れぬ、恐る同り、意下者と、既落り
どと同窓よハ、御色障り、既落り、是が神事トリ
て、ゆと、謹り、すり、御事の者ハ、必ず願金、此のことを
ゆそち、縁どと、則、神明の施、くまもつる、權現の
而、名と、シヤベニ、欽心、くまもつる、事のみこと
思へ故、長くと、書付立、日光山の近隣、ハナリとも
御、野州一國の者ハ、若き時より、ハゼヒ行幸、心取
省く多き、ハ、龕立事ありとぞ、家内との家の出
をも、バ先幕り堂へ、尋ゆけ、奉り、見く、龕り
居、バ如何、事の有ること、一切捨並連済、うねとぞ

左を有づき事。又は山の隸うつの方よりて
水岩と云ひ、平原より儀方一丈余りの高地中より
上へ五六尺を巖面出居、凸凹と筋層とて凹成皺
同ノ裏日冰生る事。と冬ハかく系一面又雷とハ
城じと皺間の冰ハ形とし、予が折るかハ文政六年
年未だ月失の事。之へて、冰澤山より有づり大用牛
ハ今一入居るとりては水岩ハ日光七亭の一處に庵人
のある事。此の原よりくり事。此の原より
を種。有との事。うきよとて予ちが草うきとて
きばあふる事。此ハまだ寒り靈地の佳境なり
日光の本山、貞原益新の日光名勝記或ハ難清松堂
の木曾路所圖繪あると見えく人の能知取之

又近來日光山志生東へ一山の車委きんトクモヒテモ也
は織り堂の車くるまハ久々えど毛けハ御調ごしらへリ見波みは
すの車くるま故ゆゑ別べつ慥たうに記き重おきね

大名のまづと御冠のありての事
東海道新宿を本陣止西八郎兵清が駕のく此時西園
筋のに五万石の満後至休跡くまきに亟ち源へ
本陣の男どもとみかんよりありとては第のれと
持く奥へ直入上役の擇除とどりてが男藏く
り我大名よ承べ一皆目通りへあきと今とば和よ居
りと見ええくまど與ぐ假りてくまく上野の上の
彼太君の高麗守へももりとぞ大名のまづ
となむとくふく見えうれ思り画脚勢りそのまく

月神ともいきままで御より居る者ぞと効ひ威ゆく
妻めり相ふと見ると思ひ居たりよしと云ふ
小冠のありまのあつて相ふの聲りて妻の事と
成するのこもハ思へるが如きを滅する故うやうの
刑罰にうそりうそり外よりおよへ八百萬（あ）
せの度と與延き黒鶴（くろつる）先みに延び持つて候
内始まると申せば延び候やとすするよの度の免罪と
云へど宣ふまへ馳跡（かけしき）もと力よき通りをゆ
寄りと程費ハ所度り度り常拂（つねはらし）とぬりと毛（け）
冰野竹林（ひやのちくりん）の山市谷 柳垂れの道中七星の
毛（け）のさきの者（じやく）へ爲（つく）五位（ごい）立勅中現うるも席（せき）り居合く
即宿（あすき）する事ちりと語りきと時ハその滿度の

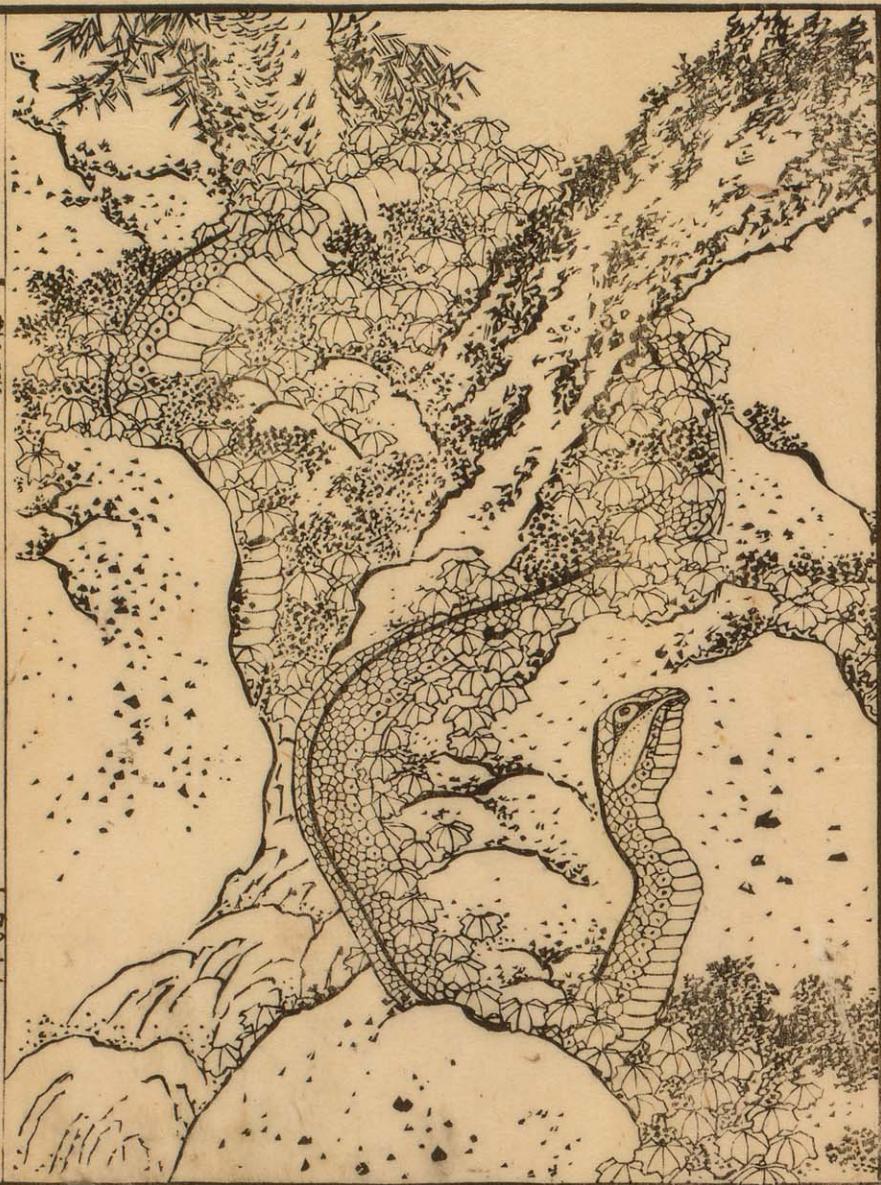
名を貰え居へよ甲十年餘りの者とて歎き今を
重名（じゆめい）に驚驚（きわきわ）とて慥（ざず）りはや柔（じゅう）てりといへ
ありまへは竹林を支へ虚言（きよごん）うやまのよハ惟（む）ぞ
尊卑の澤（わたり）ハ能心海（うみ）也（べ）

大ひ城砦の尾と截て崇（たか）らまする事

兵強勇とて右素（さく）を候だら事

信州小縣郡東上田村 上田の城下（しろした）に曾在清（せいざい）と云百姓（ひやう）河（か）
農事（のうじ）の間（あいだ）よハ蚕の繭と買集（かいしゆう）と上例と同（どう）る傍（わき）毛（け）
送り縮布（くびぬき）の類（るい）と交易（こうぎょ） 渡せとまくらをめどぞ
は毛（け）の裏（うしろ）ハ山瀬（やまぜ）と云其山の繭（ねり）に池（いけ）有（あ）く者（ひと）
其池の毛（け）よ大なる蛇一足住居（すみよけ）する左代（さしろ）く支と兵成天
と家り池（いけ）の中橋（なかばし）よちてさとと相（あわせ）と連（つづ）く房（ぼう）兼（けん）を外

げよりよ勢ひの御り供びるよ併ひ大炮出く
丈と食本うへゆきもろ本まくえ食本へ移り
寛政十年正月頃の奉うり一が曾右衛門ハ高ひ
右上列まる湯の元町へ行く道面を居より
片豊右花櫻の植替とあると
武人除り截席へり
其尾先大橋本海と其又事より
豊右房をひどく大勢
大威光をのめく蛇矛
斧と巻ひ
大刀とて玉のこゝとけと流
苦
アリキナリをす蛇余人の目よハ見えども
豊右の目よハアリケン縫糞の故祈禱とまじても駿も
ち醫附と集り藥をど用ひ武をどもか
切をなす豊右ハ四日内の内よ医く血を裏若



蛇ノ祟

四八十一



蛇ノ祟

四八

タニバハ妻トハ何カモカモモ肉ト御身モ死ヌ
即ち外ナリト醫作モヤウ行リモセモ又名モ
小黄毛モセ急モ南モナムトベシ者城糸荒
術モシテサヘ元町へあセキテキナリ御曾衣瀬モ
庵家モ相子ト異ナリ吹キヤ相支ナムバクルモテ
モ死ナリハ即チモド我ホモヅキ相有残リの所モ
明日の市メ賣耕織リテ反おハ慈意の方モリ圓モ
日一莫ゲモテヨリ口がゆるモ驚キモドヨ侍店モト
形術モ先(通)支ト大神リ用奉と所骨ト早
通毛ナリテヤ祖父以東我方の族守モテ汝ホ
シモテ出瀬と矣天ナムドモアリ無モ飯モ
食セモナムトヨリ已ゲ波モ發而モ出居モ深モアリ

する事ともぢきをも素るゝ云ハ思ひて奉たり
先祖より寺廟へ駆け廻りてそのうへとてまる
まちの邊に居ては然れどそとあくやつて極寄ち
通り併の院と極出一付のぞうとすとあくお教
直よ段と別先ニくと申切く酒の者とたうてうち
うひくとそとめ残りハ既に食をとびとて酒よ
漬ゑく日く食する。又人病へハ次才よ使く餘
二百計をもとと速り全收たり。是處とそとめ眼の方
切捨たが先と尋出。是皮とそとめ眼の方
のはく總合せまうの種の挖搜り。子豫(残)
置かれて能干堅め長押よ然たりと根
彼處ハ廿日猶と繋りて毒食をせし。是皮地の

あき大への出り。筋首。色ハ赤黒也。筋びて首
と云ふる雲野篇(重東の事)。光禪寺の寺中。僧は咄と
安陀と教へたが道理を極の事なまへと先祖が
久々ありて至る。故教大の祖と毀ち捨てハ宣
丈は逆足下の尾よハ崩卑元のめ。ハ崩ります。
我ハ出家の事。ヨリ地肉よ崩り色ハ青也。のち毀ち
きる祖と修もべとて可敵に元のめます。
右光禪寺よ崩り色ハ青也。のち夜半の事。ハ
感がるりと餘り有事形り毛ハ縁道去る夜半
父と名前。知已。彼段となく見入る居て
能あり居くの事なり。

義濃の國。熊を捕ま

暴濃の國於上郡のまび鳥村とす。僕家數三十軒
ノ村ふきども村内之山ハ二三里。酒アモニモテ廣く
は山南支々暖野。地うるば多ハ花彈加鑿。誠本
誠中あり。熊多。山集り木り。完。宿也。而も
何り。左木。右住。也。有。之。は。山。野。村。人。共。行。
其熊と捕。事。ノ。山。代。り。奇。い。事。ま。づ。き。
往。無。ハ。又。國。七。國。八。國。住。有。左。木。中。ハ。行。て
う。修。又。木。右。木。也。有。木。中。ノ。熊。
五。丈。と。六。丈。も。多。さ。ハ。七。八。丈。也。有。事。も。何。り。也
將。人。ハ。四。人。十。人。住。也。組。合。獵。大。と。連。て。正。月。
二。月。済。の。赤。雪。の。消。ア。肉。山。入。尋。り。と。熊。ア
居。木。ハ。大。も。居。其。木。の。根。と。四。り。と。頻。リ

熊
搏

吹きこよ無ハ太の鳴き声と支を本へうる源へ歸り
陽を改へうる完より出る事キテよもゝその
毛木と伐りて完へよりヘモと無ハ木本と
己の完へ医へ止ムニ已らハ完の處へ渾りぬもの
ゆゑ孫木と君へ若ヘニ也行してと出くきぬ根り
後ノハ善リ及づかず今宵ハばれり
宿あまくの木よみとべりかゞて火と焼て
夜と闇ト一束うり木の根のよきうぎんの如ニテナス
往ナリセ八寸徑の完と斧より伐明ると無出人
シニヘ來ると侍く無窮と云甚矣よ似テ
捨トすとすと等々と云餘と曰
至ト拔九率トニモ餘の穂ト
う根の

形の如き七八寸有りゆハ三寸余りと
河を越え落きて能切る圓あら猿^{さる}に食ふ出ぬと脊
骨^{あばせ}にてすかめどものうち熊達の氣づども
その^{ゆゑ}小耳^{こじみ}と云ふ熊の耳の下と又月の輪
中^{なか}を愈^よぬとバ一寒^{ひん}より歎^{なま}るゆゑ先^{まづ}二前^{まへ}と称
らひ^る寒事^{こじみ}ゆきども其面計りハ寒氣^{こぞ}るゆゑ
見ぬ^{みぬ}次^{つぎ}寒事^{こじみ}ゆき覺^{おぼ}する熊ハ中^{なか}へ引込^{ひきこ}
生^なく居^ゐる熊へ帶りてひつまもと出来^なる敵一向世活
キ^くに七足^{しちしゆ}を八足^{はっしゆ}を殺^{ころ}す^る教^{たの}う
捕^{つか}率^{りつ}と本^{ほん}と代^か替^かへ^る元^{もと}の危^きを傷^{いたずら}とせざりと
居^ゐるハ完體^{かんたい}と大^{おほ}き招^{むか}い咬^かむ^るび^るをども



立大りや



け毛り木々ハ本又後色完ト後色同一本うそ本又も
小牛種的毛色いぐも後居本のうちの中アリ
二所ニ前後色後居前多々に作リ首と手と足又
尻アリ居るのハ巖の下うどん自然と窟あり又
尻と頭アリ居るものすく先ハ穴アリ又支うる折と
あくハ極端又折とあ並一テハ海廢
據後前アメル寒敷キト奉
又載後雪潛東遊記ホアリ記一有毛と大又捕
遠アリアリ國にうと種トモ後留アリ首半ヒキ
ナリ又裏ア内木アリ居る熊とホシヒツメケル
たかアヒト目驚く形ある故傷退ニ二の玉と
お又三の印とお故大脚ハ丈アリ蜀の奉とあり

廣場かどりて、あて筋ある時ハ義士と申す者りと
腰立ひざたて丈と腰を抱つて、いつまでもむかうと居る
ゆゑ二の毛又三の毛と申すといつて、あが毛ふハ
一命とぬきを一筋もゆく生死一瞬の肉とせざして
生涯を送るといふを實り、危き波世はざわせのり
小城雪清よ山家の人の活り熊と殺奉二三足或ハ
年歿としめる熊一足と殺そ其山必嘉むかる奉者山家の
人毛と熊毛と云は故り山村の農丈ハ需て熊と
捕奉うりといへり熊よ靈育奉、事事ゆきと見え
きりうらみ然れば春濃の君上毛かみのけハ引のや
然と捕奉ハ林中奉に何ぞさきどもと見て參り
奉と覺えども云を雪中の熊の膽ハ悪あくい

あくと覺えりハなり好ひるうよし八十じゅうありと
共ともうそなり時ときうそりて、ハ一丈の膽おとこが二千石倉と
城しろうそと舊いぢの奉者じょうしゃ、終すゑの窮民きゆみんのふせん
組倉一時ひととき三十金さんきん四十金よんじんとも舊いぢの奉者じょうしゃバ是これが
あり、身代みしろともう一生涯又母妻おとめ子こと安寧あんのん
奉まつる、奉まつる、奉まつる、奉まつる、奉まつる、奉まつる、奉まつる、
湖この帆ほ湯とう、及およびさかとの奉まつる、ハ熊と殺せ
置おき、べと縫ぬいく云うぐくと大金だいきんとける奉まつる、奉まつる、
止とどく、源山幽谷げんざんゆこくと、歎あいひど是ぜよハ堅凍せんとう狹雪せうせつと
脚あしく頭かしらよハ星霜雨露せいじょううろと報ほううく、寒さむよ余あまと的てきく
うく、危あぶく、剥むしうく、余あまと已いのに殺ころと

死ノ神ノ付方ふと云ハ虚々と云繼き事

トガ忙年ノハ我方へ出入りる按摩よ可候と云前人
は者辰年の頃に角の庵我方よと云す遠國至麿
の元と走後而も先引武道の事とれど也
居家性を余極めり秀才とふとのこと行奉も
あひ物を思ひてか勤變つて教蕩孤と人よ増り
斯廢へとさりと後ハ三都の後居ハ主益城とて速
梅齊と城く生國うとバ尾張へ降り我名を居と
しゆうりは者大坂立宮の人の世へかづ地(身)
居へ共周へ鴻の角の竹と云大坂女房へ行
移あ三役在びよ右女房の云ふハ心中

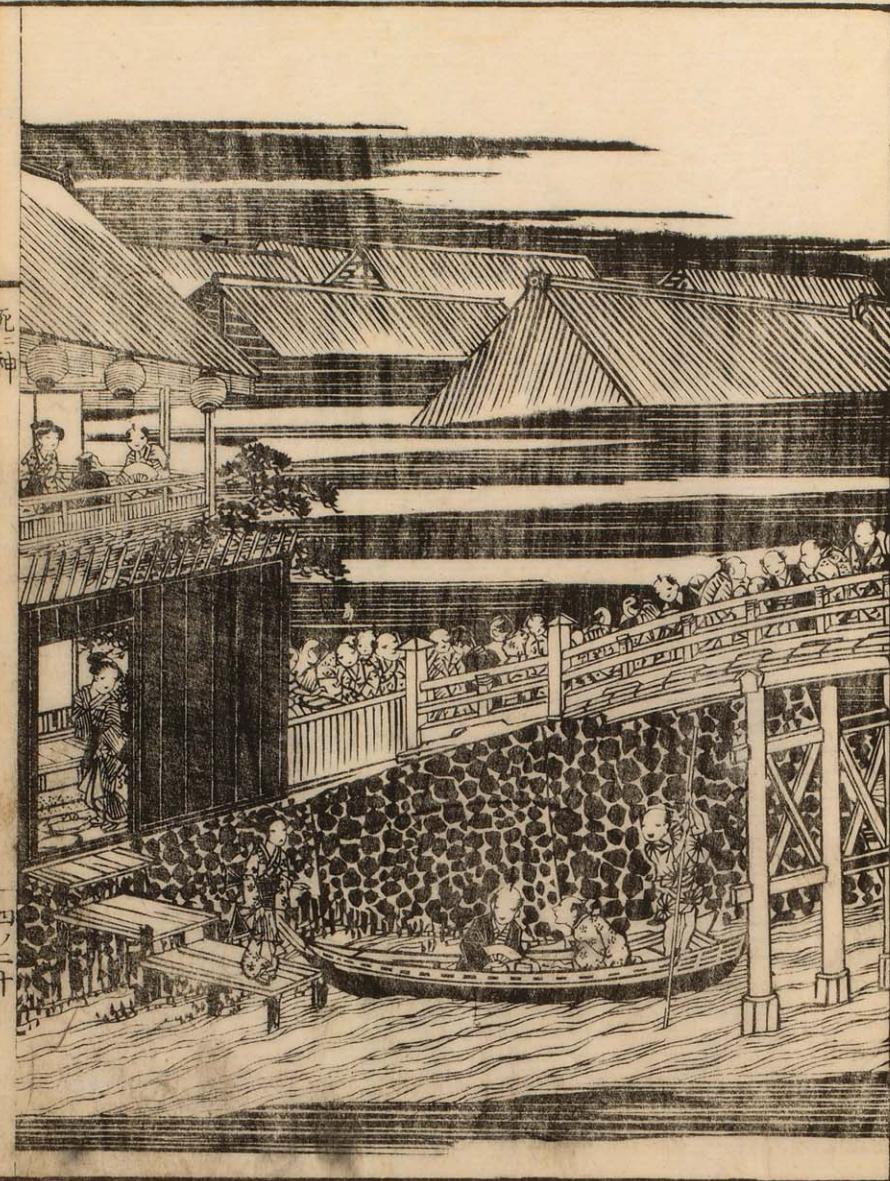
ちと死異うと云はば死やべと云なぐと行故
死と寃りと向うとバ處うる故く云そんり猶うくハ
往くままで何とべと言ふよとバ明曉死や
萬くもの事ふくと云疾い候へ遊びと後歸りよ脇
く約束の通り以曉きせひあうあり異つて
ゆせり故効福のとよと云捨へ坪りとが妻城とを
やも女うか明曉まるとバ孫もみ事うと承高ハ妻
あく共壁夜と友達くとぞにぬと通ふ酒杯絶
坐くわら樓へり見るよ女ハ侍といへ行故斯ハ馬
未りと之と愁る故道りと友達へ出會ふと通ふ
がく心ゆきと酒うど香く時と移りとす皆く
と同道する事うへとありへと云死うとと思ふ

義理不^トくハ御^ミ多^シハ心^ハ裏^リイ^テか^レ奉^スと^ク宵^ニ
外^リ居^テう^ムバ^キハ^シと^ク添^スと^ク渴^マだ
と^ク云^ハ説^クと^ク侍^ヘー^トハ思^ヘト^クと^ク友達^の甘食^も是^也
か^ク時^刻そ^トま^リた^まと^クある^トハ^シ旅^と曉^一
を^ト言^クと^クバ^キを^ク喰^フ奉^スと^クか^ク熱^ハ情^ハ移^フ
ゆゑや何^ト大^シな^シ様^リと^ク同^ヘバ^キ同^ハ猶^リく^ト夜^差
居^{ヨリ}と^ク今^ニの^事へり^ト死^ナ様^リの^事
氣^ト今^宵ハ^シ時^と後^リ運^ゲ有^クハ^シ所^ニを^ク候^ベー^ト物^何
せ^ト宣^トと^ク故^ニ宵^死ぬ^トハ^シ誰^リま^サは^シの^事
眼^乞と^ク全^夜を^ク布^シよ^シ酒^と香^ク思^入騒^ズ極^めめ^シや
う^シと^ク男^トと^ク者^ハ聲^性の^能を^の之^ク
さ^クバ^明喚^ハ此^ぞあ^ラま^シと^ク身^に無^シり^トゆゑ

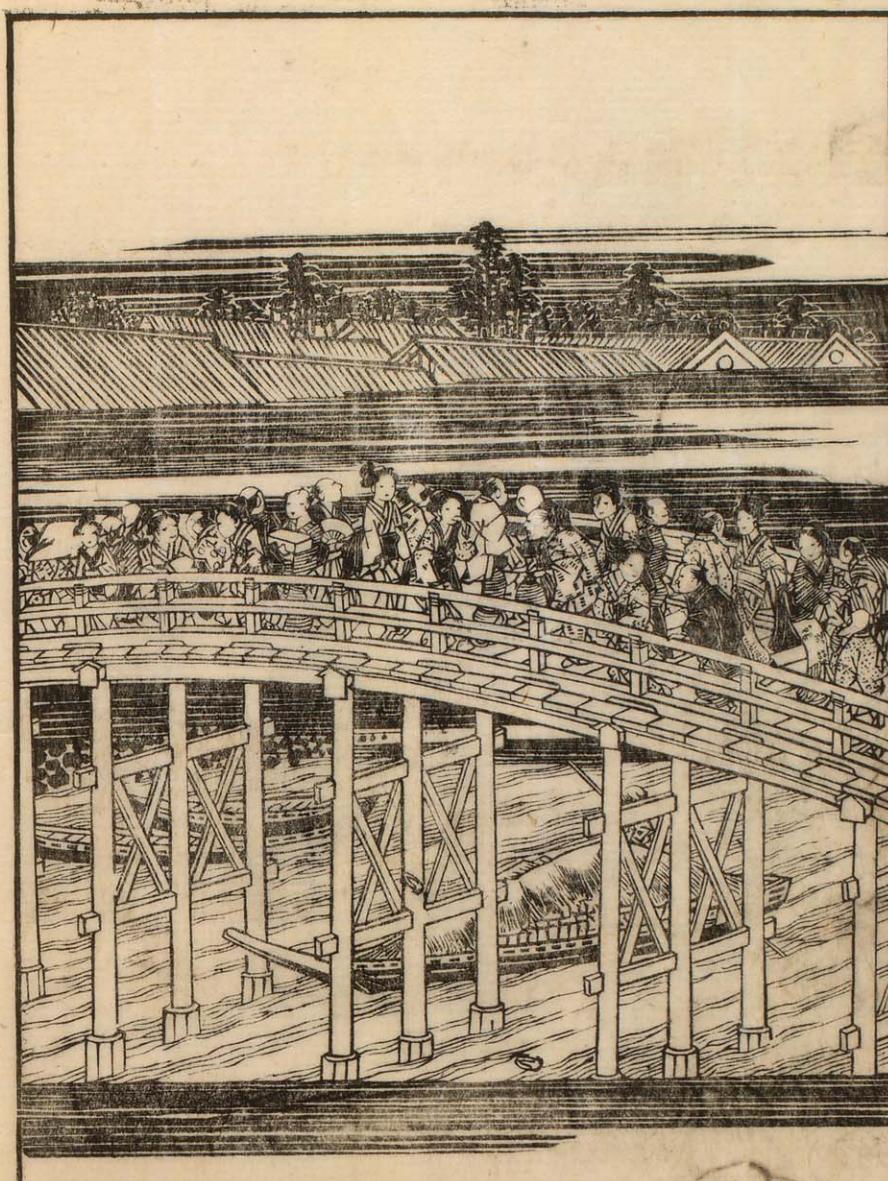
水^あと^ク一^トり^シ酒^と若^大機^使と^ク踊^リ歌^とて
お^び歸^うた^まと^ク壁^白と^ク垂^り下^く若^タに^河の
松^リ五^シ年^と成^るハ^シ兵^と食^点の^引な^シ奉^スめ^リ
我^おか^れき^ル男^よ惚^らと^クも^う一^ト又^カの^よう^モう
或^ハ金^よ魄^リと^ク云^ふも^う一^ト武^ハ久^安訓^深う^く
ほ^くの^情と^ク深^く成^ると^クも^う一^ト又^カ人^よう^モう
生^く居^くハ^シ義理^の愚^痴と^クも^う一^ト然^とう^モう
城^れハ^シ何^どの^う情^とも^う一^ト巴^ハと^クお^對う^て心^半
事^とハ思^ヘと^クも^う頃^と血氣^の事^とも^う一^ト行^ま
驚^うも^う想^緒の^事わの^数とも^思ひ^まー^トあ^ハと^クの
城^れハ^シ何^どの^う情^とも^う一^ト巴^ハと^クお^對う^て心^半
死^のと^ク面白^くん^何と^セよ^今宵^を又^{ある}庵^を
と^ク善^い出^けみ^ハ時^かよ^彼樓[（]乃^と女^と侍^居

結束へトモリヘテ並み約束の事にてテ原芝居へ
來りヘ連支ヘ内行と付添を云々出立ヘリ支外
あは演稿と行ト稿皆ア行見世ハ系履系縄松高ト
ハ面首ひ不^可彼女云々ハ下弦^{アシガタ}ハ道行も
シテアリ^{アリ}系履と水^{アシガタ}ともモヤシテアリ^{アリ}
もモカリヘテニ至買^{アシガタ}ナリ支外稿の上ヘ行
今^{アシガタ}の系履と^{アシガタ}連ば川ハ名^{アシガタ}貞道傾姫^{アシガタ}
大坂^{アシガタ}の舞京^{アシガタ}身^{アシガタ}バ稿のトヨハ行遠^{アシガタ}ハ私^{アシガタ}と^{アシガタ}羣^{アシガタ}と
ナリ^{アシガタ}身^{アシガタ}は時^{アシガタ}より^{アシガタ}は女^{アシガタ}ハ^{アシガタ}私^{アシガタ}身^{アシガタ}行^{アシガタ}と^{アシガタ}行^{アシガタ}と^{アシガタ}
行^{アシガタ}と^{アシガタ}相支^{アシガタ}の男^{アシガタ}と^{アシガタ}裏附^{アシガタ}と^{アシガタ}行^{アシガタ}と^{アシガタ}裏附^{アシガタ}と^{アシガタ}

死二神



死二神



ハ面屋よ預けまるべとソバ今死ぬあがむ相うる
とんぢやくが肩づくとトヤセと死ぬるもと費ひ
費ひハ面屋よ金バハ面屋のあと成べ一預け行んと
むりよ三處りくハ面屋よ預けまる浪花新地と
通う橋うち彼女の顔色と能見るよ大よ勢りく
象耳一途よ死ぬ事く思ふもろ肩をぬきバ未だ六
ううく女郎のやにて絆せうきどと毛切よ死ぐ仕
業ハ思ひくとくぬ事ちぐはる牛伏く約束
今更にやくとくし難一不魚成本と納むて
身と命とは傷限つよ漏れづると云と畜産のうき
宿とせ行ハせまへと思ひ出でけづ多子義理と
毛切え是よ組せく迎んと思ひども女と来て竟勝

車故娘うり番中へもと先人令想つて下第とあつりと
振り後居すからゆゑ中々力業ふくを极めむにあらる
事と爲る發充やせまうド角やせまうドと思へ因て
今まの衆をあらうり難く女ノ用意して持來うる
紺りくもとよ首と纏うんとどどと彼下第ハ中
放きもと失が一派も時計と失さんとは社
多葉粉一握たべんと云女席乃やよハリ多葉粉和
少くはすくと云ひ故富卑は世ノ名物なりばあちく
迎來り一とハナ松より急ぐ事ハナ好成たゞ二邊ハ
看せ共すとひなきバキラモ一握一石ヤベ
男の心を遠ひてゐるのそく彼社亦つゝ大おと出
一あニあホム思ひをぞくぬむア後ノ庄院

さうと明るい社の夜香の者と何者うどバ大哉
おとおひうる声へへへへへへへへへへ
もりやいよ振り宿居へへへへへへへへ
迎へへへへへへへへへへへへへへ
可恵ハキシマツル服へ迎麻道とうきく和とそよよなう
駆脚り元の魚比須萬の八面金(本)ミモリバ
蘆とせばよ唐へへへへへへへ
かけゆり丈も一二日ハ外へへへへへへ
右の事と心よ無く暮れ
御り今度ハ方角とレ羅モト天満の方へ出しけれ
素屋よ休居へへへ井わと背負へる高人ありて彼方
と下へへへへへへへへへへ

お射死有り女ハ鴻の肉の女郎トキ年ニト云ゆ
お我ホト能仰う事と有ものか若と彼女トハ
ちもヤト思ひ行やア女郎トキ同よ院よ我行る
女郎屋故ルセモトキ丈ト行ト云女郎うるやト又
同ヘバ彼高人女郎の名トハ形トジト行故主教トキト
太紳女郎ト近付故トキト心付必あるの肉ヘハ性
トキト本ダト云敵もヘト心付必あるの肉ヘハ性
太紳女郎ト近付故トキト心付必あるの肉ヘハ性
人ト搜セ自引ト能尋見リヨ知已ゲ死人也
女トキおもア男ハ遠國ト來リ唐ト色ト後に之後
女トキ旅程年と元する男行リト云ば女よハセト云
死神が行日アシテのよくカの旅の男トシ多才ト
少行カレトモナラヘトヒヤイ旅事ト意一ト
死ニ神

可收より洋よ國トキリト思ヘヨ可收よハ神有て
通キセアヒトク又ハ斬坐心の懲形ト男故死リ
神の役ト系トロ心也正トモ幸ナリ

信別伊宗院松鴻鳥乃小村ト原村の間ア

中山道下源游ト
八里半御毛毛ト

ハ二里半西ヘ僅六軒の家ナリは而ヨ小布清ト云百姓の
妹サ六七よ成女妻和年中の事ト言え一由来シ妹て
のち聲トウガリヨヒイ、リト云く泣生トヤムキ
稚娘の首ナリ縊道云よ儂養の事ト彩モトリ
テ済ハ道云カレ希モテ死ナリ右近隣松鴻鳥ト云
不ア迷惑モ一層ト行心行ハ彼家よ行くアラヨ
何トモ大物ア豪ラモトモ豪落の相アテタ其

安らぐりの度數と肩と腰と上げてまくらハ久く
人を正さざる者より見え荒果すら有れ
汝が汝の位をとるを汝が汝の事あり
水湯ハ行きてお供よ身なりに波を上げて有
在座の極楽と倚ひ向の方より肩と教へ一まく
焼火と持く波板と倚ひ曲りて左と右のの
鹽ゆゑと能く板アリけめたゞと教もあく頬と
拭ひ見るよ何本をちう又行かく思ふくゆりとハ
せ一うどとまじの目よそげるものとす竹本とし
絵く小役とあびきのとあると又ひやまと
せつどと元末道云ハう術の本よハ驚ぬ豪傑故

外よ何事をなげとばま優よ度よ儀にて肩一筋と
まく不思議成事と尋ねにの後而ハ祖父母の
代り年々とおきと親の代ると一切あらう
而うとバ姓ねとと居やと居やと云うとそ次
妹と住むまゝ又明暦年とぞと又彼女へ行
徳と道云ハ不審清氣多と生と又彼女へ行
徳と行と身と紙と墨と漆と脚巻の身と張付
白みと墨と色とそつと抜持柄となりて腰骨の
而うと初先とよすとありの肩先のとよ面てたま
神と見えね君よ何とを能源かの面へゆくと
前報のゆくなりの頬ひやりともうと身を力に往て

骨とをまとて寒よろこきよましくも着してだらく
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
勝ひへ歸り秋く見るよ額より肩へ無く～～
無りたりと城ひ後再び明りと照してのをと
身に血ハ源をりと何もうけとば支うりト外
すかよ彼昧ハ主役を活せば傷て壁船ハ後く
起坐～～～～～～～～～～～～～～
少く彼色人声乃宣～～～～～～～～
深ゆかく死ぐ唐りと云故め～～笑ゆると笑バ妻うる歎乃
座向の而障衣の地面よ革と圓入室の馬く葉上
あれとの方へ投石す死行くもあらりよまたさ大獨
絆肩～～頬を含み獨の～～體ハ體よ似て毛色も

烈神灰嵐～～尾ハ高ごちと大い～～栗嵐のど
約る慄歎なりと腰の而る右の脇腰の而と斜り
寢きえと死よ居りは失歎を誰人を自かくる
者を約束と色分別の方言よ後と云歎すりと
くく寛ぐりとば後と云のハ基の後歎すり一
形そ人よ見せぞ～～～～能の家と代くも家の
くよ骨縫い唇本とば家筋の者ハ窮く人と初
度～～婚姻すと云後物の事とやと同へハ彼而そハ
云ハ余國と云後物の事とやと同へハ彼而そハ
後物とハラモドクモドク半云事のう御とぞと
尾のうちと云ハ全く物の種類とや三列遠別すとそ
後物と云ハ事とやと云後物の事へづの敵よ名付くる

大ニ大ハ成瑞りり
顔ニ金ノ瑞ニテ尾ハ
高ニ大ハナリ先物の
尾ノシナシテ纏ひす
ヨリ見訓ざる故う小獸
ナシキ寒雲候成との
也



物とハツベジと實ハチ形ち前種者物と、燧ニ見
きりと云者ニ別荒牛と有ル能く吹毛アリモ
何と云はレ顔ノ種類といふと有本と見え
るゆゑ爰よへのと有ルやあフ、其爰物と云ひの
とは今ノ別種のものと見えアリ何よとせよこの
役歟ハ彼地アリと淮ノと見ださるモノアリ、核安
評利もくうりも高遠の城トノと人ノ見よ事アリて
彼呼人の医事ハハシノと素と見よ事アリテ後
止アリトハ本ハ右縁より垂よ支アリ吐氣アリ餘り
物医事故右向或よニ形ちと、
トキセアリ道云ハ多慶と人ニ長ジテ肉よ武藝
と云モアリ人形